

Title	近世における規矩の展開(第二報)：数奇屋について
Author	高田, 克巳
Citation	大阪市立大学家政学部紀要. 4 卷 2 号, p.15-21.
Issue Date	1957-03
ISSN	0473-4742
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学家政学部
Description	

Placed on: 大阪市立大学学術機関リポジトリ

Placed on: Osaka City University Repository

近世における規矩の展開（第二報）

—数奇屋について—

高田 克巳

目次

序	
Ⅰ 数奇屋の呼称	Ⅱ 数奇の意味
Ⅲ 実体の例示	Ⅳ 技術の伝習と数奇屋
結	

序

中世末期から近世の初頭にかけて、寢殿造、書院造や主殿造などの住宅形式に次いで茶室があるが、これから起きて数奇屋の意匠を形成したことは、我国住居文化の一つの指標とみることが出来る。しかしその根拠と名称については未だ明瞭でないものがあると思われる。

日常生活行為と、その挙動の中に人生を省観するために、作法を規定し、また環境を整えようとする住居意識から、茶室をこしらえ、またそこから発想したと思われる数奇屋の様式は、茶の湯の本質を知ることと相俟って「数奇」の意味を把握しなければ、了解出来ないものと考えられる。

これはその研究の一端であって、前報「近世規矩の展開」の続報とする。

Ⅰ 数奇屋の呼称

「数奇」という名称について、中国古典語の引用であることは、しばしば指摘されている。また「数奇屋」の呼称は我国の近世初頭にあるとされている。

室町時代には「数奇座敷」であって客間の謂で呼ばれていた。後に珠光の書では「数奇道大意」で「道」であり、「奇」は「寄」である。

明らかに独立した「数奇屋」と聞とを分けて考えるようになったのは、江戸時代初めに書かれた「織部聞書」や「茶譜」であるとされている。「匠明」には「茶之湯座敷ヲ数寄屋ト名付事ハ右同此堺ノ宗益云初ル也」とあって、堺の宗易—利休—であるとした。⁽¹⁾

然るにこれが江戸時代中頃近くになると「数寄屋」とか「数奇」と云う言葉は意味が、他に移ってしまつて茶の湯では、特にそれを避けようとしていた。

正しい意味からは、転用され奇品を偏愛する趣味の悪さを嫌ったものであろうか、一本には「数奇申す事よけ申候」とあり、又他本に「利休流に数奇と云事無之」と明瞭に打消したのは、世間の慣用語となつてはすでに本来の意味の喪失があり、利休に対する冒瀆をはばかったと了解することも出来る。⁽²⁾

現代では、普通の説として茶事を好きこのむ者を「数寄者」といい、その茶室を「数寄屋」という

ので「数奇」即好きの義であるとしている⁽³⁾。しかし一方に「茶道要録」から引用した「史記李広伝」中の「数奇」を出典としたり、又「寄」の字は「奇」即ち「偶」の対語であって、不足の義から「少欲にして足を知る」のが本旨であることも伝えている⁽⁴⁾。

前者は江戸中期頃から俗語と化したことを物語っており、後者は引用当初の本旨に近いものがあると思われる。

「数奇者」の他と変った様子なり特異とみられた動きの人々、又「数寄屋」として独立した茶室の特殊な様態は、これに冠した呼称が、俗流の語となり得るものをはらんでいるようである。かって大熊博士は意味のあいまいな「数寄屋」の名称の紛らわしさを避けて、むしろ建築上の一つの形式からいえば、「茶式建築」と唱えるのが妥当であると述べられたことがある⁽⁵⁾。

Ⅰ 数 奇 の 意 味

「茶の湯」の行為に対して「数寄を行う」とか、「数奇の上手」また「名人」など書かれているがこれは技術的操作やその法則があるという含みの言葉であると解釈できる。この点から後に「数奇」を単に物事の好きこのみに関連した言葉だけに移してしまったことはおかしきことである。

禅修行者は毎日の動静をば「清規」に規範をおいたが、それは禅定に入る場と日常の作法の統一を計ったもので、所謂風流禅といった「茶の湯」ではそのために規矩を定めている。(後に利休は表面に出すことを努めて避けた) いつれにしても精神の統一を必要とするために、六根の清浄を期して環境の一切を整える手段として規矩、即ち「数奇」の法則を適用したものと考えるのである。

この「数奇」の法則については、古くから口伝であったために、今尚幾多の茶書にも記録はなく、現今なを未だ明らかにはされていない。しかし前報で茶室と道具類との関係からその点について解明したのであるが、更にこの造型律 (proportion の関係による) の象徴が儒教的内容を包蔵したものであることも判ってきた。

その比率形式は、七・五・三或は九・五・一またはその近似数の関係で表われるものであることを指摘した。この奇数関係が如何にして規定されたかについては検討の要がある。

俗に七五三といえば、昔から日本の風習で神前に子供の成長を祝う宗教行事が残されており、又他に仏教では真言宗に七五三の称名の譜がある⁽⁶⁾。いまここではこの問題には触れない。

これらについては中国仏教 (儒教道の統合思想であることは見逃せない) によって生じた名数の関係を理解することが必要であろう。

しかしいま古代中国の典籍、「易経」によって一応考慮の必要がある。「易経」によれば「象」と「数」をもってあらゆる現象の根本原理と解するのであって、数一から十までの基数を「奇」と「偶」に分け、「陽」と「陰」がこれに属し、これを「天」と「地」の五位数に置くのである。更に「生」と「成」の数を定めて、その配置結合関係から自然、人事の一切を支配し規定すべきものと考え、それらの数理の配列法の一つとして Magic Square がある。(このような数に関する考え方、乃至この種の思想は希臘の古代にも似ている。) 中国では「九宮図」に表わされるのであるが、これは古

代の土地区劃（井田の法）の方法だとか、明堂建築の基準であるとされて、人が物を経営してゆくための範疇を規定したものであるとか伝えられている。更に説卦伝によると「八卦図」に変化して、時間、空間の後天的要素をも含むものとなる。

「九宮図」は正方形の九区分の中心に五を置き、いずれの直行位置からもその和を十五とするとき中央横の階が七・五・三であり、中央縦は九・五・一の奇数に当る。

繫辭伝上に「參伍以變，錯綜其數，通其變，遂成天地之文。極其數，遂定天下之象。非天下之至變，其孰能與於此。」とある。

參は数の三と交參するの意で、伍は数の五と列伍の意とがあって、卦爻の變を説くのである。数の三は万物の生成することを、五は分離したものを合体させて、一系列に入れることを意味し、一は絶対を表はすのであるが、二は相対を表わし、二は五との錯綜によって七数となる。七は円通ににして無碍であるとされている。そして作用と活動そのものが不定無方で、未だ定形はなく認識し把握されないものだとなっている。（これが中国禪に影響しているものを注意しなければならない）又九・五は乾陽の中にあって而も陽にして陽位を保ち、正中を得て尊位を示すもので慶賀の数とされている。

このような易道を用いて、各種の器物を制作する場合には、所謂易の象を重んじて、例えば漁具の網をつくるときには其の象を離卦に取り、鋤鉞はその象を益卦に取るというのである。⁽⁷⁾

禪の書には「宝鏡三昧」の第七節に、如是法の具体的変化論がある。これによれば、

「重離六爻。偏正回互。量而為三。變尺為五。如葦草味。如金剛杵」とある。

一如是法が一切万有に分化する関係を具体的分析的に述べられている。一重離卦の変化が三となり五となることの引例である。

仏教では一切諸法の分類の仕方の一つに、「三科」をつくり、迷界生死の世界を三分して、「三界」とする。また位置を示すものに「三昧地、三慶地」がある。共に定又は等持といい一境性と譯される。又「三禪」は色界の第三禪天のことを指していて、定生喜樂地と名づけて深妙の禪定から身心の快樂を生ずるものとして、三界九地の中で樂を受けるところの限界としては、三界中の最大で第一のものとしている。

五については「五居、五淨」即ち「五淨居天」があり、色界の第四禪である。色天において最勝の処とされている。⁽⁸⁾

七は「菩提分」として「七菩提分、八聖道分」があるが、分とは支分の義であって、分は因の義であるという。三七道品中の七覺支に名づけたものとされる。仏の菩提を成就した尼連禪河の辺、菩提樹下は即ち菩提道場であるが、菩提の本質をその広さに象どつて、それに支分の関係名数が付与せられたのであろうことは後述の例示にみられる通りである。

以上のこれらの名数は、印度や西域から伝えられた原典が、中国譯の場合とか、或は後に儒釈道の混交のときにあたってその意味は中国化したことも考えられる。

以上に表れた奇数七・五・三は、利休が南坊に伝授したという切紙によれば、折の回数を指した度数であって、区分の実際は偶数分割である。（前報参照）「数奇」とはこのような意味を内包した形態の proportion にあるのであって、形象自体は奇数と偶数は相伍して一体の器を成しているものである。

Ⅲ 実体の例示

東求堂は持仏堂として同仁齋の小書院を内にして意匠された、中世末期の重要な遺構であるが、この小書院は俗には茶室の発祥の場と伝えられているので有名である。

この東山文化の遺構に「教奇」の法を認めるのであって、利休にいたるまでの一推移過程を示すものとする。

今「東求堂」の平面計画を示せば第1図の通りである。

- A, 仏殿の間, 付A' 仏壇, 位牌壇——東求堂
- B, 小書院——同仁齋
- C, 長四畳の間
- D, 水屋及三畳を含む——旧六畳間
- O, O'は須弥壇の跡

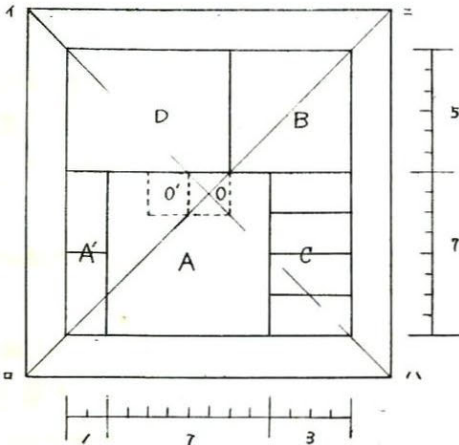
先づ持仏堂として重点を置かれるものは仏殿の間である。はじめに阿弥陀三尊を安置したといわれ後に禅寺とされたが、この本尊安置の須弥壇の位置は南面して、仏殿の間北側中央一畳程の箇処であった。⁽⁹⁾ 次には小書院としての同仁齋であろう。方丈の間として意義を持つ室である。

方三間半(椽付30尺)の持仏堂の内部設計については、この重要度に応じて「結界」としての意味を持たせた指図であったであろう。即ち第1図のような広さに該当するのである。この広さについては上代仏寺に、また曼荼羅の区劃域にみられるように比例的には同一の領域である。相似形としてその主要点は全く等しいのであって、これは仏教文化に関係ある営造物の基本的規矩であることを指摘して置き度い。⁽¹⁰⁾

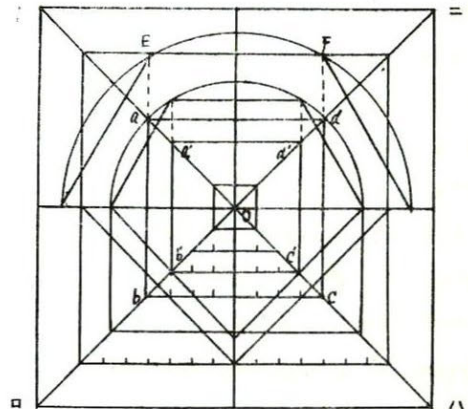
第2図は規矩図であって第1図と比較されたい。

第 1 図	=	第 2 図
A	=	a b c d
B	=	a' b' c' d'
O	=	o

第 1 図



第 2 図



仏殿の間の広さを正方形にとるのは、この第2図EFの六稜の一辺長で結成されているのであって、⁽¹¹⁾ 結界設定の一要素であると考えられる。即ち前述の菩提道場の広さ七数の矩にあたる。

須弥壇はこの堂宇の中心位置である。ただここに長方形（畳一帖程）壇が設置されていたということは、色界と無色界また色相と本質の関係からなど理解できることであるが、ここには詳論を省く。この面積の布置に当って「数奇」の法によって、前述の七・五・三の配列を考慮し法界としての一字が構成される。そして宗教的な機能を満たすための配置を遂げることで、ここに非相称の間どりの平面計画が成立するのである。一区劃単位を須弥壇の巾にとり、南面西方からは一・七・三で、東面南方から七・五の組合せによって堂内は構成される。⁽¹²⁾

以上の意匠の段階については、幾何学的形態の組合せの順序としては簡単な配列法ではあるが、これをしも偶然の結果とは考え得ないのである。

次いで近世初期のものとしては「茶の湯」で最も重要な器物の一つであるとした棚の構成を検討してみる。

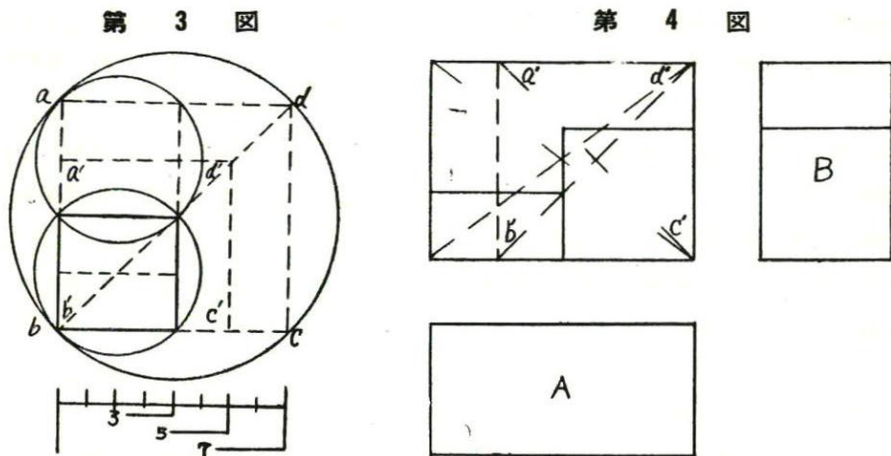
紹鷗の袋棚は「茶道筌蹄一」に「紹鷗所持の棚は、ヤリガンナの木地、引違の襖、大様モヘギ地古金欄、小縁金地古金欄、南壺サハリ水指、——鷗の歌に、我名をば大黒庵というなればふくろ棚にぞ秘事をこめけり」とある有名な棚物の一つである。

三次的展開図によって七・五・三の比をもつことをこれも前報に指摘しておいたが、歌のように秘事をこめた精巧な頗る凝った意匠である。「数奇」本来の面目を表現したものというべきであろう。

第2図をそのままの規矩として、東求堂の須弥壇に相当する一区劃の寸法の1/10として割出せば、これの「数奇」の比例が判るのである。（前報参照、寸法を省略して意匠構成図にとどめておく）第3図である。

第 2 図 第 3 図
 a b c d = a b c d
 a' b' c' = a' b' c'

第3図の方形の一辺で長さ3で高さ半分で巾の寸法を決定している。即ち七・五・三のカネ割である。第4図は A、上面 B、側面 C、正面 を示す。



Ⅲ 技術の伝習と数寄屋

中世は封建制度を樹立した武家社会に、今まで上層公家階級が独占していた学問・思想・宗教等が流れ込んで上代にみられたような公家貴族と一般庶民との間の文化的隔絶は著しく緩和された。学問・思想の方面では中国の思想や趣味が普遍的なものとなった。これが近世を通じて現代にいたるまで、社会に根強くその慣習や物の考え方を残したのである。中世では特に仏教は新しい庶民的要求に即した宗派が支持をうけたが、それは主として浄土宗であり、また中国的な要素を多分に含んでいる禅宗であった。共に庶民の布教を主眼としたのであって、男女貴賤の差別はなく弘通したのである。特に禅宗では貧しくして華美を排し、一切平等であること、又世俗の生活との絶縁、そして作法は厳守されねばならないとした。奈良の僧であって大徳寺に参禅した珠光、後に又利休も同様に禅を修めたことから、「茶の湯」を完成するまでにその真髓を禅に負うものであったことは明らかである。また体験を通じ直観によって禅定に入ることは、不立文字を標榜して師資相承を重んじたが、この影響は「能楽」や「茶の湯」をも秘伝化したとも考えられている。「数寄」の法についても「大事」「秘事」「口伝」「秘伝」の語を、南坊録をはじめ他の茶書に見出すことは、何人にも公開さるべきでないことを示している。

しかしこうした仏教は、庶民の生活力の充実をもたらすようになった。そして上代貴族社会の人々の宮宅や、或は貴族の被護に依った寺閣の建築、工芸に注がれていた技術、また宗教的な意味をもった形式までも、庶民住居の意匠に転位した。例えば寢殿造の影響や書院風の建物が武士の屋構を造り更に近世になれば自然観照の点景的な意味からではあるが、逆に生活の最小形式である貧しい茅屋をも対称にして、しかもその技術を利用して権力者や富商達の趣味的家屋と変るのであった。その風は後に茶室、茶寮をはじめ「数寄」の外見によつて平常の「屋」を造作し、遂に内容の放棄から所謂軽妙、しょうしやの風として現代の「数寄屋」造にまで変化してきたものと考えられるのである。

結

中世から近世にかけて「数寄」の呼称で創められた屋宅や器具の様式は、仏教文化のもたらすところのもので、新しい宗派や宋学などによって中世の学問・思想の庶民化とともに一般に流れ出た所産であつた。

上代からの中心仏堂の营造の規矩はその根本法則において近世まで変らぬままに持続していることの一例を見たのであるが、それはまた仏教思想の象徴的形式である。それに誘導されて近世における規矩の展開として最も特殊な発達をみせたものが「数寄屋」であろう。

（木匠としての細部に互る規矩術は、和算の進歩と共に新しく発達を遂げて来たのであるが、このことについては、この論文の範囲外である。）

- (1) 堀口捨己著 利休の茶室P.33「天正九年（1581）の利休の伝書に出ているのが恐らく最も早い表れであろうか」「匠明」は慶長十三年、平内政信伝えるところのもの。

「数寄」の「奇」と「寄」の使い方は、いろいろで一定していない。利休は「数寄屋」の例が多い。

- (2) 江岑夏書，茶譜。又二水記など。
- (3) 嬉遊笑覧，又現代の国民百科辞典など。
- (4) 史記李広伝，——以為李広老教奇母令独当单子。
韓非子十過篇，には遺有奇人者使治城郭又教奇不偶也。
- (5) 大熊喜邦著： 数寄屋建築
- (6) 天台山不断念仏發願表白に「高和七五三之唱」とある。
- (7) 繫辭伝下，作結繩而為網罟，以佃以漁。蓋取諸離。——斲木為耜，揉木為耒。——蓋取諸益。
- (8) 仏教辞典P.642, P.541, P.1630
- (9) 山本栄吾論文： 東求堂復原考，建築史研究24, P.9
- (10) 高田稿： 古代の規矩，建学報第28号
- (11) 例えば凝然の八宗綱要鈔などをみれば「六相，六道，六通，六位」「六大法性周遍諸法」とか「一切諸法不離六大」など各宗に互る教義の句を考えることから，法相，即ちその象徴形体をつかむことができる。
- (12) 須弥壇の位置の一区副長は十六数でその倍数の巾と長さを法量度数に比較すれば，その象徴性をみることができると考える。
- (13) 唐希遷の參同契は万象の差別相と宇宙の本体である平等一如は融即していることを詩形で撰している。